物性研に着任して

物性理論研究部門 川畑 幸平

2013年に東京大学に学生として入ってから 10年が経って、教員として東京大学に勤めることになった。生まれ育った関西を離れて初めて駒場キャンパスに来た 10年前の気持ちと、東京での9年間の学生生活およびプリンストンでの1年間のポスドク生活を経て柏キャンパスに来た今の気持ちは、もちろん大きく異なる。

駒場には理科3類で入学し、当初は医学部に進むつもりだった。中高生のころには国際物理オリンピックに参加するなど、大学以降の物理もすすんで勉強していたが、物理がふつう対象とする自然現象よりも、人間が関わる営みにそもそも興味があり、脳科学や神経科学を専攻しようとした。しかし、しばらく医学部の研究室に通って顕微鏡に向かっていると、医学研究に適性がなく、人間であるとはどういうことかといった理論にむしろ関心があることに気づく。関心の内容から自然なように、同時期に人文科学をよく学ぶようになった。文字通り生をかけて自分の感覚に内側から向き合い、特異であるがそれゆえに普遍性を帯びるような哲学や文学を学んだ。世界にはこんなひとが生きていたのかと驚き、その底知れなさを感じるとともに、ずっと抱いていた閉塞感が解消され、希望がもてた。

人文科学と自然科学では、どちらがより遠くに行けるのだろうと考え、その選択に悩み続けたとき、自分の目の前には何人かの自由な先生がいた。目が覚めるような鋭いテクスト解釈を示す哲学の先生、生命科学で博士号を取りながらも美術史に転向した先生、「つまらない医者だけにはなっちゃだめだよ」と言った医学の先生。自分自身の問いに妥協せず向き合うその姿は輝いて見えて、つまるところ、自分は学問そのものに関心があるのだと自覚した。学問をすることをつうじて、世界に新しいものの見方の地平を与えられるようなことがしたかった。それに気づいたとき、どの分野を専攻するかはそれほど重要ではなくなっていたが、特異な思想を展開した過去の哲学者がもし今を生きていたとしたら、物理を専攻するのではないかというようなことを思った。将来的に哲学や文学を専攻することになっても、まず物理を学んだほうがいいようにも直観した。

そうして理学部物理学科に進学して、大学院では物性理 論を専攻した。物理の理論研究に適性があるかどうかを判 定することが目的で、適性がないとわかったらその後は人 文科学の大学院に入り直そうと思っていた。その判定のた めの大学院5年間と最初から考えていたこともあって、物 理の研究にはできるかぎり努力した。しかし、心性として は人間的な営みに惹かれていたこともあって、自分が物理 を専攻していることに、つねに引け目があった。5年間の 期限が近づいてきた博士課程の半ば、新型コロナウイルス が世界を直撃したころ、自分にとって何が重要か、再び悩 んだ。そうして自身のこれまでの研究を見返したとき、歴 史のなかで残ってきた概念と比較するともちろん些細なも のであっても、それでもたしかにあたらしい概念が提示さ れているように思った。究極的には、自分が物理に感じて きた魅力は、現象自体は自然のなかでただ生成生起してい るはずなのに、自然に内在するわけではないフィクショナ ルな概念を人間が生み出して、ひとまとまりの論理的な物 語が作られることにあった。その意味で、小説を読んだり 映画を観たりするなかで得られる感動と、自分のなかでは 同じ感覚だった。自分の研究がそういったあたらしい概念 をすこしは与えられていると思えたとき、こういう物理学 者が世界にいてもいいだろうと、自分自身の存在を肯定で きるようになった。

大学院を卒業してからは、プリンストンでポスドクとして勤めた。幼いころから欧米の大学にあこがれていたものの、ずっと留学する機会がなく、その最後の機会ではないかと思っていた。期待と不安をもって臨んだプリンストンでは、多くのひとにめぐまれて、自分の研究は好意的に受け入れられた。国際的な研究環境との接続を維持し、同時に自分が重要だと考える問いに向き合い続けることさえできれば、どこにいても研究を続けられるだろうと思うことができた。

医学部に進むかどうか迷いながら、駒場の教室で哲学や 美術の授業を受けていたころからずいぶん遠くまで来てし まったような気がする。そのころいやだったのは、自分の 生に関わるような人間的なこととまともにぶつかることを 恐れて、それを避けるようにして自然科学に専念すること だった。それに無自覚でいることもいやだった。自分もこ れからそういう研究者になっていくか、はたしてどうか。